

中山市長の驚くべき発言



I LOVE いしがき HP



I LOVE いしがき FB

2019年3月27日 I Love いしがき FB ページに投稿

八重山毎日新聞の2019年3月27日付記事です。

74年前の1945年3月26日、陸軍特別攻撃隊として戦死した伊舎堂用久中佐(24)と隊員らの慰霊祭

伊舎堂中佐らの冥福祈る 陸軍特別攻撃隊として戦死



伊舎堂用久中佐と隊員の慰霊祭で、献花する南九州市知覧特攻平和祈念館の朝隈克博館長ら＝26日午前、南ぬ浜町緑地公園

慰霊祭(同実行委員会主催)が26日午前、南ぬ浜町緑地公園の顕彰碑前で行われ、約50人が参列し、伊舎堂中佐らの冥福を祈った。

当時、大日本帝国陸軍第八飛行師団隷第十七飛行隊隊長の伊舎堂中佐は、特攻隊長として旧陸軍白保飛行場から出撃。中佐を含め10人の隊員が、多良間列島西方海上の敵艦に体当たりし亡くなった。

式では、三木蔵実行委員長と、南九州市知覧特攻平和祈念館の朝隈克博館長が献花し、中佐のおいにあたる伊舎堂用八さん(81)と登野城さんと、中佐が出撃前に宿泊した前盛家の喜美子さん(76)と白保さんが般若

心経を誦経した。

三木会長は「今の価値観で特攻を語ってはいけない。若い人々が国を思い、特攻したことは尊いこと」と敬意を表し、中山義隆石垣市長も「特攻隊について

は戦後教育としてさまざまに検証があるが、石垣島で本場の事実を伝え、特攻隊の方々が命をかけて守ったものを私たちの世代でも守っていくことが大切だ」と語った。

ここで中山市長が語った「特攻隊の方々が、命をかけて守ったものを私たちの世代でも守っていくことが大切だ」とは、何を意味するのでしょうか？

特攻隊への思いはさまざまだとしても、胴体に爆弾をつけた飛行機で、若いパイロットたちを敵艦に突入させる「生還率ゼロ」の戦法が、本来あってはならないもので、それをも避けられなくするような戦争は、もう二度と繰り返してはならない、ということについては、ほとんどの人が一致しているのではないのでしょうか。でも、中山市長は、ちょっと違うようです。

「命をかけて守ったもの」とは、何でしょう？

特攻隊長として24歳の若さで慶良間の海に散った伊舎堂用久さんの願いは、父母の島を守りたいということだったかもしれません。しかし、それは叶いませんでした。

先島諸島の特攻機発進基地を潰す任務を帯びたイギリス軍とアメリカ軍の艦隊によって、島は、軍用飛行場を中心に、激しい空爆と艦砲射撃を受け、多くの人命を失いました。その上、特攻基地の島への敵軍上陸は必至と見た陸軍の軍命によって、住民がマラリア有病地に強制疎開させられ、3000人もの方が命を落としました。特攻基地の存在が、島を英米軍の標的にしたのです。

それでもなお「守ったもの」があるとすれば、それは、「国」あるいは「国体」以外には考えられません。

では、それを「私たちの世代でも守っていくことが大切だ」とは、どういうことか？

中山さんの日頃の発言からすれば、それは、軍艦攻撃用のミサイル（地対艦ミサイル）を置く陸上自衛隊の基地を受け入れるということでしょう。

このミサイルは、「現代版無人特攻機」です。島から発進して、海面すれすれに飛び、200kmも先の相手の軍艦を捕捉・追跡・体当たりして爆発・破壊する兵器なのですから。

こういうミサイルを置けば、有事には、相手はその基地を潰そうと大量のミサイルを撃ち込んできます。それは、八重山戦の教訓が示すことです。逃げ場のない島で、多くの人命を落とし、暮らしも、自然も、惨憺たる姿に変わるでしょう。

それを覚悟で国を守るのが私たちの世代でも大切、なのではないでしょうか？

それよりも、非武装の島を保ち、外交と交流の力で紛争問題を解決する方が、ずっと安全だし、若くして散っていったパイロットたちの思いにこたえる道でもあるのではないのでしょうか。